

氏名	金子多喜子		
学位の種類	博士（ヒューマン・ケア科学）		
学位記番号	博甲第	8656	号
学位授与年月	平成	30年	3月 23日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当		
審査研究科	人間総合科学研究科		
学位論文題目	看護師の感情労働への対処スキルに関する評価ツールと 教育プログラムの開発		
主査	筑波大学 教授	博士(ヒューマン・ケア科学)	松田ひとみ
副査	筑波大学 教授	医学博士	水上勝義
副査	筑波大学准教授	博士(医学)	森田展彰
副査	茨城大学准教授		金丸隆太

論文の内容の要旨

金子多喜子氏の博士学位論文は、看護師のメンタルヘルスを向上させるために効果的な感情対処の教育プログラムを開発し検討したものである。その要旨は以下のとおりである。

研究1：感情的不協和とバーンアウトの関連

(目的) 著者は、感情労働の主要なストレスとされる感情的不協和とバーンアウトの関連について、看護技能習得段階別に明らかにすることとしている。

(方法)

メンタルヘルス不調者の約半数を占める若手看護師（日本看護協会, 2012, 看護経験年数が5年以下）の395名について、質問紙調査（日本語版感情労働尺度（荻野ら, 2004）、日本版バーンアウト（久保, 2007））を行っている。感情的不協和の内的要因がバーンアウトへ及ぼす影響を、看護技能習得段階別に検討するために、クリニカルラダーⅠ・Ⅱ・Ⅲの看護師ごとに感情的不協和の2変数（葛藤頻度と葛藤強度）を独立変数、バーンアウト要因（情緒的消耗感、脱人格化、個人的達成感の低下）を従属変数とする重回帰分析（強制投入法）を行っている。

(結果)

感情不協和への促進的影響として、ラダーⅠでは、葛藤強度のみ「情緒的消耗感」（ $\beta = .337, p < .001, R^2 = .138$ ）（ $\beta = .323, p < .01, R^2 = .129$ ）、Ⅱでは、葛藤頻度のみ「情緒的消耗感」（ $\beta = .247, p < .01, R^2 = .080$ ）、ラダーⅢでは、葛藤頻度は「情緒的消耗感」（ $\beta = .445, p < .001, R^2 = .183$ ）と「脱人格化」（ $\beta = .312, p < .01, R^2 = .170$ ）に、葛藤強度は「脱人格化」（ $\beta = .203, p < .05, R^2 = .170$ ）を見出している。著者は、感情的不協和の葛藤頻度と葛藤強度がバーンアウト傾向に及ぼす影響が、看護技能習得段階により異なりことを明らかにすることができた。

研究2：効果的な感情対処の検討：尺度作成

(目的)

感情労働に伴って生起する感情への対処傾向を、患者・看護師間の感情対処を同一枠組みとして分析し、新たな感情対処傾向を測定する尺度を開発し、効果的な感情対処を検討することとしている。

(方法)

関東圏内300床以上の病院に勤務する看護師279名を対象とし、質問紙調査、再テスト法で、調査1回目は、看護師版感情対処傾向尺度に加え、構成概念妥当性検討のために4つの既存尺度、日本語版感情労働尺度(荻野ら,2004)、多次元共感性尺度(鈴木ら,2008)、アレキシサイミア(後藤ら,1999)、日本版バーンアウト(久保,2007)を用いている。

(結果)

看護師版感情対処傾向尺度は探索的因子分析(最尤法、プロマックス回転)で“患者感情優先対処”“自己感情優先対処”“両感情調整対処”“両感情回避対処”の14因子を抽出している。Cronbachの α 係数は.611～.751、再テスト信頼性は $r=.635\sim.778$ であり概ね信頼性は確保されている。

著者は、患者志向的に対処をしながらも自己志向的にも対処できる“両感情調整対処”をすることが、感情的不協和の増強を回避し個人的達成感を高める可能性を示唆し、より効果的な感情対処方略であることを明らかにした。

研究3：認知再構成法による心理教育の効果検証

(目的)

効果的な感情対処を促進するため、ユニークな心理教育プログラムとして認知再構成への取り組みをサポートするためのマンガ教材を開発し、Webを活用した調査によりその効果を検証することを目的としている。

(方法)

“両感情調整対処”を促進するための認知再構成法による効果について、対照群を設置しない非ランダム化前後比較デザインによって検証している。介入効果検証のためプログラム介入前・後・介入終了1ヵ月後に行った調査を、一要因分散分析(反復測定)で共変量に看護経験年数を投入し分析している。

(結果)

両感情調整対処($F(2,48)=3.61, p<.01$)、患者感情優先対処($F(2,48)=3.53, p<.05$)において有意差を認めている。また、多重比較の結果、両感情調整対処では介入前より後と介入後1ヵ月に1%水準で有意に向上し、患者感情優先対処は介入前より後、介入後より介入後1ヵ月に1%水準で有意に低下することを明らかにしている。

全体考察・結論

著者は看護師のメンタルヘルス向上のため、より持続可能性の高い感情対処の方法を獲得するには、感情の抑制ではなく調整が必要であることや両感情調整対処の有用性を明らかにすることができた。また、本研究の心理教育プログラムが、若手看護師の感情対処傾向を変容させる可能性を示唆している。

審査の結果の要旨

(批評)

金子氏は、若手看護師の離職やストレスに関連する感情の対処について、感情労働尺度等を用いて丁寧に分析している。特に教育プログラムによる効果の検証のために、自らがマンガ教材を開発しWebを活用した調査によりその効果を検証することができた。同プログラムにより、患者と看護者自身の心情を調整する“両感情調整対処”が可能になることを明らかにするなど意欲的な取組みといえる。今後、病院内の看護師を育成し支援するためのプログラムとして採用されることが期待され、社会貢献性の高い研究成果であると考えられる。

平成30年1月19日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士(ヒューマン・ケア科学)の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。